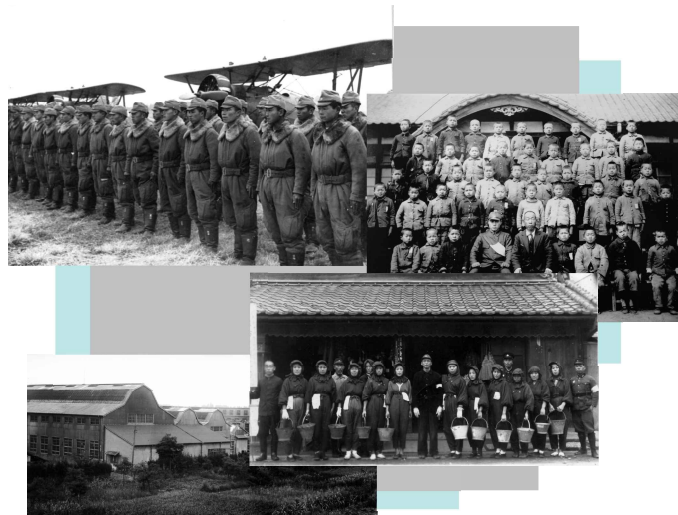


昭和の戦争と桶川

―戦後75年を迎えて―

展示期間 令和2年8月1日～8月30日



昭和の幕開けと戦争への道



昭和の日本は、関東大震災後の震災恐慌が収まらない中、昭和2年の金融恐慌、さらには昭和4年（1929）10月の世界恐慌の荒波を受けることになり、経済的苦境の中で幕を開けました

政治経済の危機に直面し、昭和の政治は大きな岐路に向き合うことになります。

荒川の河川改修

この写真は、昭和4年（1929）4月に撮影された荒川河川改修工事の写真です。蒸気機関車にけん引された大型の掘削機とともに、誇らしげな男たちの姿が写っています。

この工事は大正7年（1918）から続けられた大工事ですが、桶川付近の工事は昭和恐慌のころに行われています。不況の中で、桶川の人々はこの工事に参加して暮らしをたすけたそうです。



満州事変

昭和6年（1931）、奉天（中国東北区瀋陽市）郊外の柳条湖における鉄道爆破事件を契機として、満州事変が起こります。この動乱は、現地の関東軍によるもので、これまで政党内郭が担っていた国家外交が軍人の武力によって転換されることを意味します。満州事変に続き、昭和7年（1932）3月には、関東軍に主導されて満州国の建国が宣言されました。

以後、昭和の社会問題を大陸への軍事進出で解決するといった論調が世論として受け入れられていきます。

二・二六事件

二・二六事件は、昭和11年（1936）2月26日、陸軍の青年将校が天皇親政の下での社会革命をスローガンに掲げ、配下の兵士を率いて行動を起こした事件です。

軍の独走を押さえていた岡田啓介首相をはじめとした要人が襲撃され、斎藤実らが落命しています。決起部隊は反乱軍とされ、原隊復歸の命令を受け、2月29日には鎮圧されました。

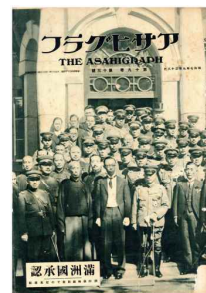
事件に巻き込まれた兵士たちは、5月に満州に送られ、やがて日中戦争が開戦します。

日中戦争 戦争と報道

満州事変の翌々年、昭和8年（1933）に国際連盟を脱退した日本は、日独防共協定を締結し、ドイツとの連携を求め、軍備増強と戦時体制の構築を進めていきました。

昭和12年（1937）7月7日、北京市郊外の盧溝橋で起きた日本と中華民国の軍事衝突をきっかけとして日中戦争が始まります。

昭和の戦争では、新たなメディアとしてラジオ放送と写真雑誌（グラフ誌）が登場します。『アサヒグラフ』では、たびたび日中戦争の特集が組まれ、掲載された報道写真は、戦場と国民を結びつけました。



熊谷陸軍飛行学校桶川分教場



第一次世界大戦時に兵器として使われるようになった飛行機は、偵察から戦闘機、爆撃機へと役割を広げていきました。

日本においても、大正14年（1925）5月に陸軍航空本部が置かれ、戦力の整備が急速に進められました。戦力の拡大に伴い、操縦者の育成が急務となり、昭和10年（1935）熊谷陸軍飛行学校が設立されました。

日中戦争がはじまった年でもある昭和12年（1937）、熊谷陸軍飛行学校のもとで川田谷村字若宮に桶川分教場が開校しました。

展示資料より 『少年倶楽部』付録 神風号

朝日新聞社の「神風号」は、昭和12年（1937）4月に、イギリス国王の戴冠祝賀に向い、立川飛行場からロンドンまでの間を94時間17分56秒で飛ぶという快挙をなしとげました。この時期、兵器としての飛行機は進歩を遂げ、多くの若者たちが大空への道を進むべく、熊谷陸軍飛行学校を目指したのでした。



桶川分教場の日々

桶川分教場では、歩兵、砲兵などの兵科から飛行兵を志願し入隊してきた召集下士官、少年飛行兵、学徒出陣の特別操縦見習士官への基本教育が主に行われ、20期余り、推定1,500～1,600名の操縦者を戦場へと送り出しました。

桶川分教場で学ぶ生徒は、全国から集まり、共同生活を送っていました。生活を営む学校施設として、守衛棟、兵舎棟、便所棟など多くの建物が建てられ、その一部は今も現存しています。

一日の授業には、午前の座学と午後の操縦訓練とがあり、班によってこれらを入れ替えました。食事や入浴、就寝も班ごとに分けられ、陸軍の規律に沿った集団生活を送りました。



下士官90期 石井貞助氏のアルバムより

桶川分教場と特別操縦見習士官

昭和18年（1943）6月に首相兼陸軍大臣の東條大將は、航空を重点とする軍備建設を指令しました。

陸軍は、大学をはじめとする高等教育機関の在校生や卒業生を対象として短期間で操縦者を育成することを目指し、特別操縦見習士官制度が発足しました。

志願した学生たちは学鷲と呼ばれ、わずかな訓練を経て士官となりました。彼らは、操縦者として十分な技量を身につけないまま戦闘に参加し、特攻にも動員され、多くの犠牲者を出しています。



『学鷲』朝日新聞社



白田智子氏所蔵資料より

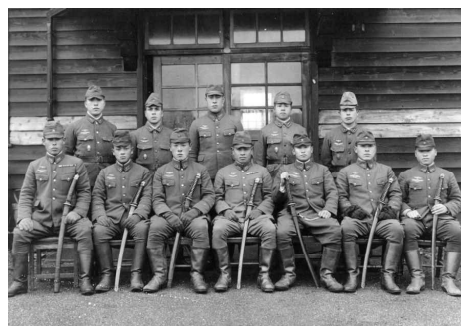
伍井芳夫大尉と特別攻撃隊第23振武隊

昭和20年（1945）2月に、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖され、航空師団へ改編されました。飛行学校で訓練を受けた少年飛行兵や特別操縦見習士官の若者たちも戦闘に参加することになり、その中に桶川分教場で教官をされていた伍井大尉がいました。

伍井大尉は、明治45年（1912）7月に加須市（旧大利根町）に生まれ、航空士官学校を経て熊谷陸軍飛行学校の教官となりました。下士官時代から桶川分教場の教官をつとめ、桶川町に家族とともに暮らしていました。

飛行学校とともに生きてきた伍井大尉にも昭和20年2月28日に陸軍特別攻撃隊第23振武隊隊長の命が下り、特別操縦見習士官出身者を含む隊員12名は3月27日に栃木県壬生飛行場を発って鹿児島県知覧飛行場に向かいました。

3月31日に出撃命令を受領。4月1日早朝、知覧飛行場から沖縄に向けて出撃されています。



出撃前の第23振武隊 壬生飛行場にて

戦争と郷土の兵士



『アサヒグラフ』昭和12年9月1日号 表紙より

昭和12年（1937）、北京市郊外の盧溝橋（ろこうきょう）で起きた日本と中華民国の軍事衝突をきっかけとして日中戦争が始まります。

昭和15年（1940）に日独伊三国同盟を締結し、昭和14年（1939）に始まった第二次世界大戦における枢軸国の一翼を担うことになります。

昭和16年12月8日のハワイの真珠湾奇襲と同時に日本は英国とアメリカ合衆国に宣戦布告し、太平洋戦争が始まります。開戦と同時に日本軍は、資源の確保を目指し、マレー半島やインドネシア、さらにはアメリカ合衆国の植民地であったフィリピンへと戦線を拡大していきました。

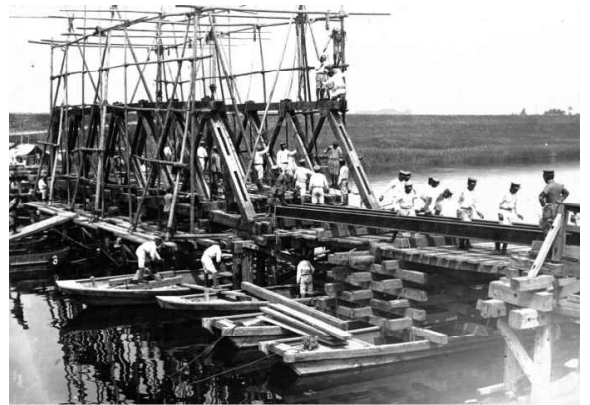
中国大陆の戦地へ ―日中戦争に従軍した桶川の大工―

昭和12年（1937）8月、日中両軍の交戦が拡大していく中で、政府は陸軍2個師団を上海に派遣することを決定しました。派遣された兵士の中に桶川町の大工、島村源三郎氏がいました。

島村氏は、工兵第一連隊留居隊に応召され、同日第一師団渡河材料中隊に編入されました。工兵は、橋梁や鉄道の敷設、飛行場の建設など軍の交通の確保を担いました。上海、徐州、宜昌などの激戦地をくぐり抜けた後、島村氏は、昭和15年（1940）11月15日に交代のため南京港を出発して20日に宇品港に帰還し、25日に召集解除となりました。



支那事變従軍記章



渡河訓練 島村等氏のアルバムより

南太平洋の郷土兵 ―激戦地からの帰還―

連合軍の反攻が本格化する昭和17年（1942）になると、中国戦線から南太平洋の前線へと、兵士が送り込まれていきました。

このころになると、兵士は兵役が終わっても故郷に帰ることなく、現地召集されたまま転戦を繰り返しています。

川田谷出身の小川さんは、中国湖北省から南方に向かい、昭和17年11月にブーゲンビル島に上陸しています。ここは激戦地であり、多くの兵士が犠牲となっている中で、小川さんは生き抜き、終戦を迎えました。

昭和21年（1946）2月22日、小川さんは無事故郷に復員を遂げました。小川さんは、戦後も、復員した折に身につけていた軍装品を大切に手入れしていたそうです。苦しいときも自分とともにあり、自分の身を守ってくれた品々に思いを寄せていたのかもしれない。

そして、これらの品は、現代の私たちに、従軍した郷土の兵士の暮らしを伝えています。



小川徳治氏の出征 樋詰氷川神社



略帽と軍衣



携行薬
クレオソート丸 錠剤



背囊（大正6年製）

太平洋戦争と国民の暮らし



防空訓練（桶川町）

太平洋戦争が始まる直前の昭和16年（1941）に国家総動員法は改正され、統制は勤労働員、食料や生活物資、さらには言論の統制へと拡大し、まさに国家の資源である「ヒト・モノ・カネ」が戦争遂行のために使われる総力戦体制が出来上がっていきます。

国民は、「進め一億火の玉だ」のスローガンのとおり、総力戦への参加を求められました。徴兵によって成人男性は戦地におもむき、女性や学生たちが、いわゆる「銃後の守り」を担うことになり、労働や防空などの負担も増していきました。

戦時下の暮らし

太平洋戦争が始まると、生活物資の不足はあっという間に深刻となっていました。主食である米は、昭和16年（1941）4月からは、通帳による配給制となりました。

膨大な軍事費をまかなうために、国が発行する貯蓄債券の購入が近隣組織や職場などを通じて割り当てられ、人々は半ば強制的に協力を求められました。

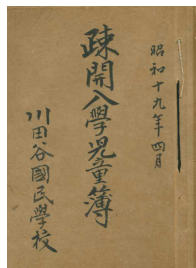


米穀購入票

戦時貯蓄債券

戦時の学校と少国民

昭和16年（1941）4月1日、国民学校令が出され、それまでの尋常小学校と高等小学校は国民学校と改められました。子どもたちは、「少国民」と呼ばれ、戦時の総動員体制にあって大人と同様に国民としての義務を果たすことが求められました。



昭和19年（1944）6月に日本本土を目前とするサイパン島への攻撃が始まると同時に、学童疎開が始まります。昭和19年の「疎開入学児童簿」には縁故をたよって川田谷村にやってきた疎開児童名が記載されています。

疎開入学児童簿



加納国民学校

皇国第一八八八工場 ―戦時下の三井精機桶川製作所―

現在は商業施設や住宅団地となっている桶川駅の西側は、昭和56年（1981）まで三井精機工業株式会社桶川製作所の敷地でした。

この工場は、太平洋戦争開戦の前年、昭和15年（1940）に三井工作機株式会社桶川製作所として設立され、昭和20年8月15日の終戦まで「皇国第一八八八工場」として軍需生産の一翼を担っていました。

勤労課長兼厚生課長であった石亀繁太郎氏は、戦時中のできごとを日誌に記し、昭和63年（1988）に『皇国第一八八八工場』として出版されています。

桶川製作所では、設立時から少年工を採用し、工場内には国民学校に続く教育機関である青年学校が設置されていました。

昭和19年の年末において、桶川製作所で働く人々は3,545名に達していました。また、工場からは520名の人々が出征しており、勤労者の不足を女子挺身隊や熊谷中学（現在の県立熊谷高校）などからの動員学徒が補い、生産を支えていたことを石亀氏は記録しています。



皇国第一八八八工場（三井精機桶川製作所）